

ひしが、二度目の時は、たゞ一度の面識に過ぎざる小生を記憶し居られ、十年の知己の如く親しく物語られしには、却つて小生の方にて痛み入り候。些事とは申しながら、斯の如きはたしかに大下先生の人格を見るべき半面に御座候。

大下先生の水彩畫は、上野の展覽會場にて毎年觀來たり候ひしも、所謂展覽會向きの繪は一枚も無く、いかなる小幅にも全生命を傾注されしものゝ如くに存じ居り候。其の色彩と言ひ、其の調子と言ひ、全く先生その人の人格を結晶したる独自の氣分を有し、之を貫くに誠實を以てしたるもの、尊ぶべきは此一點と存じ候。要するに大下先生は畫の爲に畫を描かず、自然に對し、人物に對し、先づ感じて後に筆を執られしものに候へば、先生の作品は一つくが抒情詩なりと申すべく、俗向きの大作——形の上の——に乏しかりしも、おのづから先生の藝術的良心を證するものに御座候。所謂無聲詩とは譬喩的に申したる言葉に候へども、先生の作品にあつては、單に無聲詩といふのみならず、實に其の一景一彩が皆個性の明瞭なる抒情詩にして、もし先生の畫集の成る時あらば、そは繪畫を以てしたる一大抒情詩集たるべく候。

此の誠實なる水彩畫家、後進の誘導に親切なりし水彩畫家、水畫普及に貢獻少からざりし水彩畫家、最も詩人的態度のありし水彩畫家、——要するに畫界の恩人にして且つ詩人たりし水彩畫家大下藤次郎氏を失ひしは、我が畫界の爲め少からざる損失に御座候。今や再び溫容に接すべからず、而かも先生の事業は尙ほ前途遼遠たり。痛惜の至に御座候。頓首。日本中學校教師室にて。

## 故人大下畫伯に就て

文學士 樋口 龍 峽

抑々予が大下畫伯とはじめて相知つたのは、往年谷中の美術院で、研究所建設の費用を集めん爲め同志の



人々と共にその作品を分れたときであつた。

爾來さまで深い御交際をした譯ではなかつたが、藝術に就ては主張もストルツも持つて居りながら、社交的には謙遜な親切なその人柄に對して、常に敬服して居たのである。

數月前上野の展覽會場で、抱月君等とともに大下君の風景論を聞いて後に、新日本の七月號でそのお説をそれとなく引いて、予の日本風景觀を發表したことがあつた。文中に氏の名を挙げなんだのは、もしや誤解でもあつて、氏の令名に累を及ぼしてはならぬとの微意であつた。

然るに藝術的良心の強い大下君は、翌月の「みづゑ」誌上で予の批評が自分の説に向けられたことを公表して、氏の意見は瀬戸内海の局部に對する説であつたことを告げると共に、門外漢たる予の意見を大體に承認されたのみならず其後會見したときにも、淳々として自家の見を述べて予の批評をさへ求められたその際遠からず更にゆつくり會見して、藝術上の見を交換しやうとの約束をしたのであつた。

底事ぞ奇才帝の惜むところとなつて突如招かれて白玉樓上に還られてしまつた。もはやとこしえに相見の機もなく、相語るの約も果されない。まことに遺憾の極であるのみならず、氏の逝去の當時、予は大隈伯爵に陪從して東北に遊んで居たので、葬列に連なるの禮をすら悉し得なかつた。重ね／＼の行違は氏に謝するの途もなく、唯往時を想望して追懷の涙にくるゝのみである。

人生棺を蔽ふて是非始めて定まるとか。定めて故人の藝術や人格に就ては、更に親しき人々や藝術の人に依て評せられることゝ思ふ。門外漢たる予の見を忌憚なく述べれば、大下君の作品には、予は剛健の筆意や底しれぬ深さや、神韻の生動を認むるものではない。が併しその溫雅なる性格はおのづから作品の上に現はれて居て、一種人をなつかしめる様な氣分が常に現はれて居たと信じて居る、鋭い觀察や深さはなくとも平和なおつとりとした所に、その長所があつたのではなからうか。色彩の研究に就ての抱負は嘗てうかいつたともある。此點の成否はしらず苦心のあつたとは予も認めるのである。けれども今は故人のことで







人々と共にその作品を分たれたときであつた。

爾來さまで深い御交際をした譯ではなかつたが、藝術に就ては主張もストルツも持つて居りながら、社交的には謙遜な親切なその人柄に對して、常に敬服して居たのである。

數月前上野の展覽會場で、抱月君等とともに大下君の風景論を聞いて後に、新日本の七月號でそのお説をそれとなく引いて、予の日本風景觀を發表したことがあつた。文中に氏の名を擧げなんだのは、もしや誤解でもあつて、氏の令名に累を及ぼしてはならぬとの微意であつた。

然るに藝術的良心の強い大下君は、翌月の「みづゑ」誌上で予の批評が自分の説に向けられたことを公表して、氏の意見は瀬戸内海の局部に對する説であつたことを告げると共に、門外漢たる予の意見を大體に承認されたのみならず其後會見したときにも、淳々として自家の見を述べて予の批評をさへ求められたその際遠からず更にゆつくり會見して、藝術上の見を交換しやうとの約束をしたのであつた。

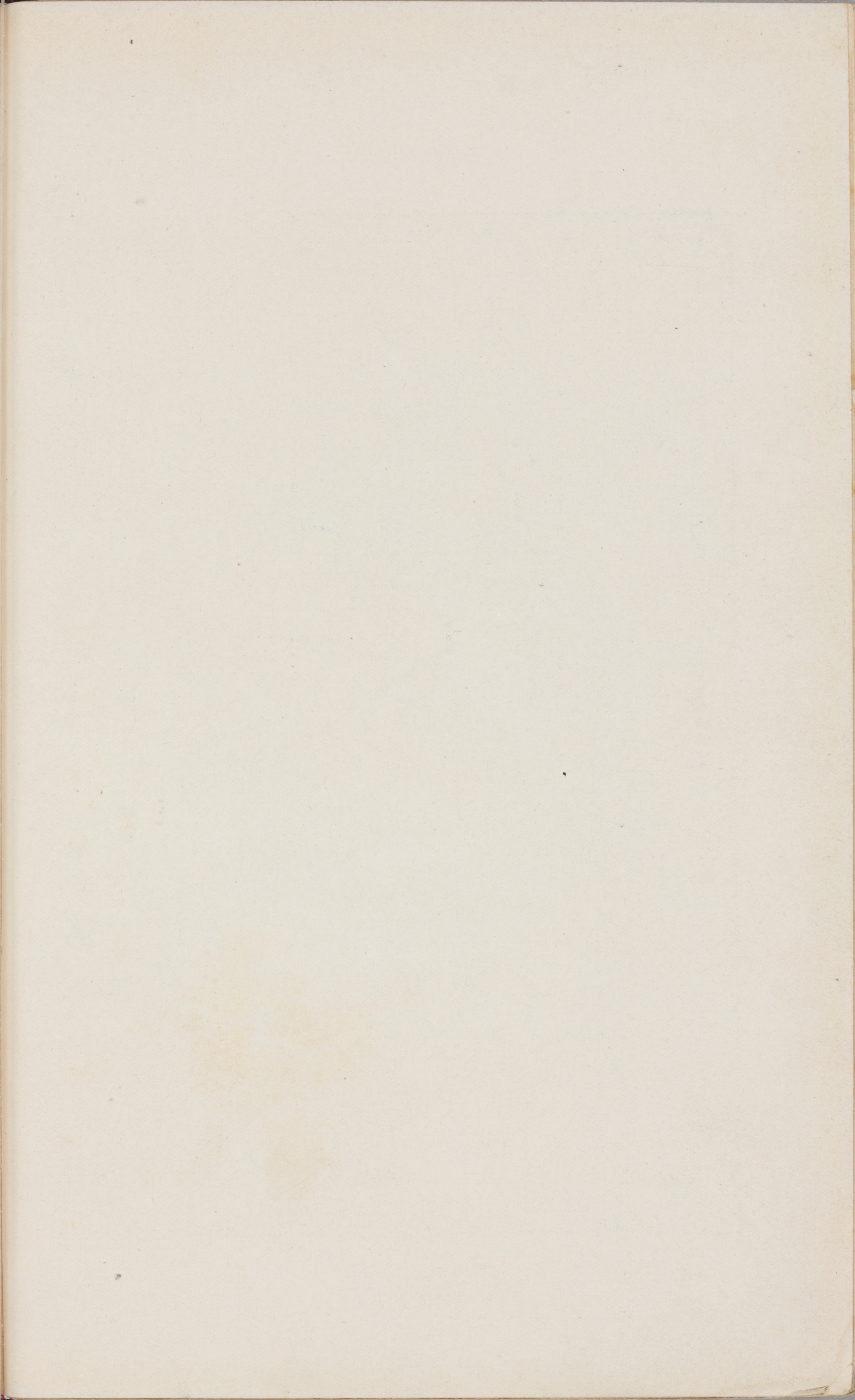
底事ぞ奇才帝の惜むところとなつて突如招かれて白玉樓上に還られてしまつた。もはやとこしえに相見るの機もなく、相語るの約も果されない。まことに遺憾の極である。のみならず、氏の逝去の當時、予は大隈伯爵に陪從して東北に遊んで居たので、葬列に連なるの禮をすら悉し得なかつた。重ね／＼の行違は氏に謝するの途もなく、唯往時を想望して追懷の涙にくるゝのみである。

人生棺を蔽ふて是非始めて定まるとか、定めて故人の藝術や人格に就ては、更に親しき人々や藝術の人に依て評せられることゝ思ふ。門外漢たる予の見を忌憚なく述べれば、大下君の作品には、予は剛健の筆意や底しれぬ深さや、神韻の生動を認むるものではない。が併しその溫雅なる性格はおのづから作品の上に現はれて居て、一種人をなつかしめる様な氣分が常に現はれて居たと信じて居る、鋭い觀察や深さはなくとも平和なおつとりとした所に、その長所があつたのではなからうか。色彩の研究に就ての抱負は嘗てうかゞつたともある。此點の成否はしらず苦心のあつたとは予も認めるのである。けれども今は故人のこととて











あるから、姑らく琴臺の故事を學んで深くは論ぜずに置から。

因に云ふ。氏が畫家以外に一種の紀行文家として低からぬ地位を占めて居られた一事も、予の敬服した一つである。

門外漢たる予にしては思はず絮説に過ぎたかも知れぬ。しかしこれ氏の葬列に臨み得なかつた予が、一片追慕の至情から出た永別の辭である、誄辭である。

## コスモス咲く頃

織 田 一 磨

夏の強い、色彩から漸く遠ざかつて、やゝ涼しい、頃になると、自然は、何となく寂寥の感じが加はつて、春の季節とは全く、反對の現象になる、春は、冬の長い間の沈黙の後をうけて、華やかになるが、秋は夏の強い色彩が、段々と褪せて、冬の暗い沈黙に、再び歸る仕度であるから、自然も従つて何とはなく、物悲しい感じに満ちて來る、春の季節が、若い女のような、華やかな淋しさなら、秋は老人の悲しさと云つたような調子であらう。東京の町端れに、背の高いコスモスの花が、ピンク色や、白に咲き出すのも、此頃である、朱い燃える様な、ダリアの花に、どことなく寂しさが感じられるのも、此頃である。

そうして、ちようどコスモスの、咲き出す頃は、灰色の肌寒い日が、毎日々々續いて、人々の腦裏に、一種の哀愁を起さすのも、此頃である、元來自分は、靜な自然が好きで、秋の曇り日は、其内でも殊に好きである、甲高い百舌鳥の聲の、透る空も、赤蜻蛉の翅に、白く露の玉が置かれて、朝の光線が、キラ／＼と露のむねに光るのも、面白い、黄色い花の咲く雑草の姿や、總べて秋の印象は一ツとして、自分の氣分にさからうものがない、全く佳く、調和されて居ると思ふ、四季の内、春も靜かであるし、冬も動いては居ないが、春や冬の、自然には秋の